コラム

難民問題

長澤　榮治

中東は難民の十字路である。本報告書の執筆時点で最大の関心を集めているのが、2011 年に始まるシリア内戦の難民である。これについては本報告書の他の該当箇所（とくに第 1 章）を参照されたい。この戦争の犠牲者は、2014 年末で 20 万人を超えたと推計されるが、300 万人以上の難民が隣接国のトルコ、レバノン、ヨルダン、イラクへと逃れたといわれる。しかし、11 年前の 2003 年には、彼らとほぼ同じ道をたどってイラクからの難民が反対方向から逃げてきた。この年の 3 月に起きたイラク戦争とその後の混乱から国外に脱出した人たちである。当時、ヨルダンやシリアなどに逃れたイラク難民の数は、120 万人から 140 万人に達したが、今回のシリア難民の規模はそれをはるかに上回る。さらにそれから 12 年前の 1991 年の湾岸戦争の後には、およそ 150 万人のイラクのクルド人が難民化した。戦争直後、クルド人はサッダーム・フセイン政権に対して蜂起したが、苛烈な弾圧を受けたためであった。

現在のシリアの事例を上回る規模の難民問題を中東は経験してきた。アフガニスタンの難民数は、1979 年のソ連侵攻後、戦局の変化に応じて増減の波を繰り返してきたが、2001 年の 9.11 事件後の米軍の攻撃によって 740 万人の難民が国外（イラン・パキスタン）に流出したという。独立前後から始まったスーダン内戦（第一次・第二次）は、長きにわたり国際社会から無視され続けた悲惨な内戦であった（一説では犠牲者は 200 万人を超えるという）。スーダンの避難民の数は、UNHCR の推計（2011 年）によれば、合計 550 万人、国土が広いこともあり、国内避難民が 464 万人、海外避難民 86 万人であった。

もちろん中東にとどまらず、世界で最も深刻な難民問題は、パレスチナ難民問題である。問題の深刻さは難民の規模だけではなく、パレスチナ問題が持つ世界規模での重要性によるものである。これについては本報告書の他の該当箇所を参照されたい。ただ若干の補足をするなら、パレスチナ人が体験したのは、1948 年パレスチナ戦争と、1967 年 6 日戦争の二回の難民経験にとどまらないことである。今回のシリアとリビアの内戦でも彼らは難民化（再難民化）したが、それ以前にもイラク戦争、レバノン戦争、ヨルダン内戦など、何回も難民となり、「難民の十字路」を文字通り右往左往してきた。今後、中東で再び大規模な難民問題が起きる場合、必ずや多くのパレスチナ人の姿がその難民の波の中に見出されるであろう。

難民問題への対応は、今後ますます重要な国際的政策課題となると考えられる。たとえば、レバノンなどでのシリア難民への教育支援は極めて不十分であるが、これはこの地域において長期にわたり人的資源開発の制約要因となり、莫大な経済的損失を与えるだけはなく、社会不安や政治的危機の原因になりうる。そうした意味で遠隔地の難民問題は、世界の安全保障問題と直結している。日本では 2014 年の難民申請者が難民認定制度を設置した 1982 年以来、最大の 4,500 人に達したが、今後、国際社会から難民問題対策をさらに積極的に求められる可能性が高い。そのためにも、文部科学省の国費外国人留学制度において紛争地域（アフガニスタン・シリア・イラク・パレスチナ・スーダンなど）からの特別枠を設けるなど、長期的には国益に直結する独自の制度を構築していく必要性がある。